

no.
4

古着の「循環フエス」
名古屋で初めて開催される！

井澤 知日

はじめに

最近では環境意識の高まりから、脱炭素や3Rの取り組みが企業や市民社会に定着しつつある。素材によりリサイクル率は異なるが、ペットボトルやプラスチック、アルミ缶などは九割前後、古紙が六七%と少し下がる。それに対し、衣料品は三四%と非常に低く、残りは埋立てや焼却に付され、環境負荷が大きい素材となっている。

海外での取り組みは

ヨーロッパ（EU）では、繊維製品に対する廃棄物の収集、選別、リサイクルの費用を負担させる拡大生産者責任（EPR）制度の導入や一般製品（繊維に限らず）の性能、素材の起源、環境への影響などの情報提供にむけたデジタルパスポートの導入が進められている。



ランスでは売れ残った衣料品の埋立てや焼却が禁止され、これらをリユースやリサイクルするよう反浪費・循環経済（A G E C）法が二〇二〇年に施行された。またオランダでは繊維製品の再利用やリサイクル率の目標を二〇三〇年で七五％、スウェーデンのそれは二〇三六年で九〇％と高く設定されている。

古着の循環フェス開催へ

そんな彼の状況の違いを踏まえ、日本でも繊維製品を循環させるシステムを構築していく必要がある。環境省の調査では、十八枚の衣料を購入し、十五枚がが廃棄されている状況がある。最近では様々なメーカーやブランドショップが回収・再利用する対応に取り組んできているが、十分ではない。

そこでリサイクルのNPOや環境意識の高い企業、行政等が一体となり、デジタルネイティブで消費の中心である若いZ世代（十五〜三十歳層）を巻き込んで、名古屋ではじめて「循環フェス」を本年四月に開催した。場所はエディオン久屋広場である。なお、開催にあたっては、

京都で循環フェスを三年前から六回の実績を積み上げている、(株) ヒューマンフォーラム等から惜しみない支援をいただいた。

この循環フェスの目的は、①衣料品等の回収拠点を全市に広げた回収システムの構築、②回収した衣料品等のリユースやアップサイクルの促進、③循環を担う多様な主体の育成、に取り組む契機とすることである。

なお、当日は、リユースを促進するため（集客も期待）、一人三着まで無料

で持ち帰れる¥0マ
ケットと古着の回収の
ためのブースを設置し
た。

成果と期待と

来場者は約一万人、
出店ブース七一。古着
回収量約六三一kg
(二五二三着)、古着リ
ユース量約六九七kg
(二七六一着)とわずか
一日六時間でこれだけ
のキャッチ&リリース
ができたのだ。ここで特
筆すべきは、Z世代を中
心とするボランティア
の活躍である。大学生は
もちろん高校生も運営



循環フェス名古屋 2025 のポスター



¥0 マーケット



古着マーケット

支援や出展に参加し、循環の大きな力になっているのは確実である。今回は意思決定から開催までの時間があまりなかったため、参加する企業や学生に限界があった。今回の実績と経験を活かして、次回からはよりインパクトのある循環フェスを実現できそうだ。そして、京都から名古屋へ、名古屋から周辺都市へと拡大していきたい。

＊なお、筆者は主催者（実行委員会形式）のメインである認定NPO中部リサイクル運動市民の会の理事として運営に参加した。